

特集：最近問題になっている茶の病害虫

# 京都府のチャにおけるミカントゲコナジラミの発生と防除対策

京都府病害虫防除所 <sup>やました</sup>山下 <sup>こうじ</sup>幸司\*・<sup>はやしだ</sup>林田 <sup>よしきみ</sup>吉王

## はじめに

日本では、チャを加害する害虫は100種余りが知られ、このうち各地の茶園で発生が多く被害が問題となっているものはアザミウマ類、カメムシ類、ヨコバイ類、アブラムシ類、カイガラムシ類、ハマキガ類、シャクガ類、キクイムシ類、ダニ類および土壌線虫類などである(南川・刑部, 1979)。コナジラミ類による被害は、同じ *Camellia* 属であるヤブツバキおよびサザンカにおいてツバキコナジラミ *Aleurotrachelus camelliae* (KUWANA) が知られるが、チャでは1960年および62年に静岡県の一部でヤマモモコナジラミ *Parabemisia myricae* (KUWANA) の発生が報告されたのみである(南川・刑部, 1979; 日本応用動物昆虫学会, 1987; 本間, 2003)。ところが、2004年8月に京都府宇治市白川の茶園でミカントゲコナジラミ *Aleurocanthus spiniferus* (QUAINANCE) の発生を認めた。本種のチャへの寄生は日本で初めての確認であり、京都府病害虫防除所は2005年6月に発生予察特殊報を発表した(山下ら, 2005)。

本種は亜熱帯あるいはその周辺地域の原産と考えられ、日本を含む東アジアの温帯から熱帯にかけて広く分布している(大串, 1969)。本種のチャへの寄生は中国および台湾で報告があり(中国農業科学院茶業研究所, 1986; 蕭, 1994)、地域によっては主要な害虫の一つである。日本には明治中期に海外から侵入したと考えられ、現在は本州以南の各地に分布し、これまでにカンキツ類の産地でたびたび多発した(大串, 1969)。

本稿では、本種の茶園での観察および京都府内での発生調査結果について述べ、防除対策について考察する。

## I チャにおける生態と被害

筆者らによる茶園での観察では、本種の成虫は主に新

葉の裏面に静止し、葉層内やうねの周囲を飛翔しており、葉層より下の樹幹部ではほとんど観察されなかった。卵は葉裏に直立して産みつけられ、新葉に多く見られたが古葉にも認められた。幼虫・蛹は葉裏にのみ寄生しており、多いものでは1葉に200頭以上が確認された。

チャにおける本種による被害は、成虫および幼虫・蛹による葉の吸汁加害と、幼虫・蛹が分泌する甘露によるすす病の併発が知られている(蕭, 1994)。筆者らによる観察でも、本種の多発生茶園において、夏期以降に下葉にすす病の発生を認めた。また、これらの被害のほか、2005年は成虫の発生時期と一番茶摘採期が重なったため、収穫時に作業者の周囲で成虫の飛翔が頻繁に見られ、時には吸入するなどして不快害虫としての一面が見られた。

## II 京都府内における分布と発生

2005年4月から11月にかけて、京都府内全域において本種の発生調査を行ったところ、京都市伏見区、宇治

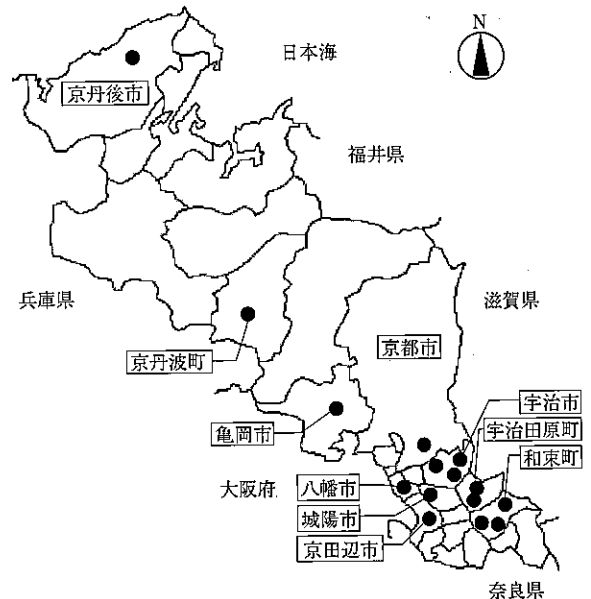


図-1 京都府のチャにおけるミカントゲコナジラミの分布  
●：発生を確認した地点。調査期間：2005年4月から11月。

Occurrence and Control of the Citrus Spiny Whitefly, *Aleurocanthus spiniferus* (QUAINANCE), on Tea Tree in Kyoto Prefecture. By Koji YAMASHITA and Yoshikimi HAYASHIDA

(キーワード：ミカントゲコナジラミ，チャ，京都府，分布，発生消長，防除対策)

\* 現所属：京都府立茶業研究所